

## 石毛直道氏の講演

【石 毛】 まず、社会人類学でいう社会進化論についてちょっと説明しまして、欧米で成立した社会進化論は一神教的な世界の思考様式と大変関係があることを指摘いたします。それにたいして、二項対立の論理にもとづく欧米と東アジアの社会での時間や歴史の考え方はどう違うのかといったお話をしたいと思います。

社会進化論はプロGRESSではなくてエボリューションの話です。社会進化論には、デカルト以前からずっと西洋の一神教の世界にある考え方というのが反映されているのではないかと考えられます。中世の西洋では、宇宙の存在を全部分類して、それをランク別にあらわします。ですから、まず存在の頂点に神様がいて、つぎのランクに天使が位置づけられます。それから人間がある、それから人間に動物や昆虫があり、植物がある。こういう世界秩序観があったわけです。

さて、近代の学問としての社会人類学で、社会の進化というものをどういうふうにかと考えると、まずルイス・モルガンの説があげられます。この人はアメリカ人ですが、アメリカの先住民の親族組織を調べて、それで1877年に『古代社会』という本を書きます。そのなかで人間の社会を3段階に分けます。野蛮(サベッジ)、そのつぎ未開(バーバリズム)、それから文明(シビリゼーション)というふうにだんだん人間の社会というのは高度化してきたんだと述べています。このモルガンの説はマルキシズムに大変な影響を与えて、岩波文庫から翻訳されているエンゲルスの『家族、財産及び国家の起源』はこのモルガン説の理論的な根拠にもとづいています。

さらに、近代的な学説としましては、20世紀の中ごろにミシガン大学のレスリー・ホワイトという有名な教授が、1959年に『文化の進化』という本を刊行するわけです。彼は人間の社会を段階的に評価しようとするところみます。彼は社会というものは、技術の体系とそれから観念の体系と、それから社会のシステムの体系から成り立っているんだとします。それで、物質的な基盤になる技術から人間の社会の進化の度合いを見ていこうというわけです。その場合、それぞれの社会が1年間に1人当たり使うエネルギー量によって評価しようと提案します。そうしますと、利用可能なエネルギーが多くても、それを有効に使う技術がなかったらいみをもたない。そうすると、エネルギー量×技術で社会進化の段階を評価しようというのです。それで4段階を設定します。まず第1の段階は、人間が利用できるエネルギーというのは人間が体を動かす人力エネルギーにたよる社会であるとされます。これは狩猟採集

民の社会を想定するわけです。2番目の段階としては、人間が農業をするようになって、作物を育てる、家畜を育てるようになる。太陽エネルギーによる光合成を人間のつくりだした栽培植物や家畜に利用して、それを食糧として生産して、それから貯蔵する、そうやってエネルギーを得る農業社会の段階です。3番目の段階が、産業革命あたりを想定した動力革命で、エンジンや電力を使用するようになる。動力革命によって石油、石炭だとか天然ガスといった地下資源をエネルギーとして使用する段階になる。それから4番目が、核エネルギーが戦争の道具としてだけではなくて、人々の日常生活に役立つようにされる段階であるというわけです。これは「単系進化論」とでもいうべきもので、世界の社会は、この順序の段階を経て進化してきたとかがえるのです。そのホワイトの影響を受けて20世紀中頃の社会進化論はアメリカが主導権を握ったわけです。その弟子のシュアートだとかサーリンズなんていう人々がいて、ホワイトの影響を受けながら、単系進化論ではなくて、社会というのはそれぞれの社会が置かれた環境によって進化の道筋がちがう。そういった進化の原動力が何であったかというのは、それぞれの社会によってちがう、それは後から見た結果としてわかることなのではないかと述べます。

しかしながら、そうはいいながらサーリンズは人類の社会をやはり5段階に分けています。最初が「バンド社会」といって、狩猟採集民の数家族が集まって一つの集団をつくる。それがまた離合・集散していく、そういった大変フレキシブルな小さなバンド社会である。そのつぎの段階が「部族社会」とされます。例えばマサイ族とか何々族といわれる部族社会というのは、原則的には人びとが平等な社会であって、その平等な人々が文化の同質性にもとづいて社会組織をつくりだした段階である。そのつぎが「首長制社会」で、近代的な国家形成まではいかなくとも、権力者というのが社会の組織体の頂点にある社会である。つぎの段階で「国家」というものをつくった。国家のつぎ「産業社会」が形成されたというわけです。

こういった考え方には、ある有用性があります。例えばいろいろな世界中の社会を比較するとき、これは部族社会の中での枠組みで比較するのか、バンド社会比較するのかといったような共通の枠組みを設定することに有効なわけです。こういった欧米でできた社会進化論というのは結果としては、原始的な社会からはじまり、しだいに高度な社会へと、下から上へ人間は発展する筋道を通るんだという考え方です。歴史の経過とともに人類の社会は進化するものであるという、そういった信念にもとづいているわけです。

こういった欧米の進化主義にたいして、実は、時間がたてばたつほど社会はよくなるかといったら、そうじゃないという、変ないい方をしたら、懐古主義とでも、退歩主義とでもい

うべき歴史観もあります。これを代表するのが過去の中国文明です。孔子は『論語』で「述べて作らず、信じて古を好む」と述べています。これを解釈すると、孔子は自分の歴史的な事実だとか、昔の人の思想を自分は記述することはするが、創造はしない。それで昔のことを信じて、それで過去に愛着を抱く、そういう物の見方をするんだといっているわけです。春秋時代に生きた孔子がいう「いにしえ」というのはいつ頃のことかということ、儒教の基本的な経典である五経に書かれている、中国の王朝でいいますと、夏、殷、周の王朝、それが聖人君子の世の中であった。現在の社会というのは、その過去の聖人君子の世の中に立ち戻るべきであるということです。それで、過去に文明のモデルを設定します。古代の文物だとか制度に、文明のお手本を求める。これが儒教の尚古主義ということなわけです。儒教が中国の国家の学問になったということもあって、尚古主義漢の時代から、つい近代中国になる前の清の王朝まで、建前としてのイデオロギーでした。例えば、中国では官吏登用試験である科挙という大変な難関の試験を突破しないと高級官僚にはなれませんでした。科挙の試験を通るためには儒教についてよく知らなくてはならないし、答案を書くときも、現在の世の中をどうしたらいいかといったら、この尚古主義にもとづく答案を書かなければならない。あるいは、自分の独創的な意見を述べるときも、自分の意見としてではなくて、何かそれにかかわりある古代の聖人君主の言葉を引用して、答案を書かなくてはいけない。その科挙官僚の予備軍が中国の知識人であったわけなので、中国の知識階級のイデオロギーの中核となるこの尚古主義が大変な影響を与えたわけです。

この尚古主義とそれから漢民族が世界で一番だという中華思想が一緒になると厄介なことになりました。そうすると、中国以外の国で生まれた思想だとか技術だとか、それから学術の取り入れにたいして大変な反発が起こるわけです。そこで、近代世界のもとになる西欧文明の取り入れも中国はおくれたわけです。おなじ東アジアのなかでも、新し物好きで、過去よりも未来に信頼をかけるという、そういった傾向が強い日本社会とは大変対照的なんです。よく、海外の人ばかりではなく、日本人も東アジア社会の共通点として儒教をとりあげて、日本は儒教社会の国だったといわれますが、それは私は全然違うと思います。日本では科挙の制度もなかったし、儒教の思想で国家を運営するということは一度もなされなかった。儒教というのは知識人の教養にとどまった程度のことです。

さて、一神教の論理についてこれからちょっと触れます。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の一神教の世界では、神と人間の間には越えることができない大きな断絶があるんです。そこでは、人間は神になることはできません。しかしながら、日本の神道だったら人間はい

くからでも神に祭られてしまう。菅原道真は天神さんになり、近代になっても乃木将軍は乃木神社に祀られるということがあるわけです。しかしながら、こういったのは一神教の世界ではあり得ないことで、神のつくりたもうた人間と神の間には断絶があって、人間は神にはなれない。それから今度は、人間と動物の間にも断絶があるんです。そこで、ダーウィンの進化論にたいしても大変な反発がある。アメリカだと、今でも義務教育でダーヴィニズムを教えたらいけないという州があるんだそうです。しかしながら日本人の精神文化の基層にはアニニズムの世界があります。それをある宗教的なまとまりをつけたのが神道で、これはアニニズムの宗教です。アニニズムというのは山川草木、いろいろなものに靈魂の存在を認めるわけです。それらの存在の間には断絶はありません。民衆のことわざで、人間に3本毛が足りない仲間がサルですね。そこでサルの仲間の霊長類から人間が進化したというダーウィニズムが日本に紹介されたときに、何の抵抗もなくすんなりと受け入れられたわけです。

我々は一神教とは全く違う、一神教というのは他の宗教を徹底的に排除するものです。お正月は神社に神詣でをし、葬式や法事はお寺へ行く、日本人の精神世界は、一神教とは大分違う世界なんです。一神教では自分の信じる神様以外に神と称するものは、これはまやかしである、虚構であるという、そういう考え方なわけです。そこで二項対立の論理というのが大変強いわけです。つまり、二項対立というのは一方を採用したら他方を排除する二者択一の論理なわけです。AとBという対立物をペアにするわけですが、神と悪魔、真実と虚構とか、正義と悪といったように分けて、神だとか真理だとか、それに対する悪や虚構は状況によって変化するものではなくて、普遍的な対立関係である。そういった普遍的な存在なので、そこで対立するものは力で排除しなくてはならないという、そういう論理があります。欧米が主導権を持って形成された近代の社会秩序というのは、この論理にのっているわけです。そうしますと、欧米が文明社会であり、それに対してキリスト教の福音を知らない非欧米社会というのは、これは野蛮であるということになります。それが正統対異端という図式にのったときに、そうすると野蛮な社会を文明化するのは正義であるという論理ができます。ということで、植民地化が正当化されるわけです。

もちろん、こういった物事を相反する2つのカテゴリーに分類するというのは、一神教特有のものではありません。例えば、善と悪だとか、喜びと悲しみ、本当と嘘といったふうに、現象を対立項に分類して認識するということは人類全体にたぶん共通する論理だと思います。こういうふうに現象というのはただ存在するのではなくて、それをカテゴリー分類することによって論理的な認識というものは成立するわけです。また、性格が極端に相反する、

異なる事象を対立させて、それで説明するのはもっとも単純明快で、しかも説得力をもつ分類法なわけです。一神教の社会では、それが宗教的な権威と重なることによって、二項対立のこの論理が、ほかの社会からいわせたら、特殊発達したんではないかと思えます。ここでは、対立するAとBの間の中間領域というのを認めない傾向が大変強いように思います。あるいは、AとBの重複する領域、それを認めなくて、とにかく対立物を完全に分離して考えようという思考様式が発達したわけです。このような社会ですと、人生だとか世界というものは、善と悪が対決する場としてとらえられたりします。それで、善が悪に打ち勝つために努力するのが、人類の使命であるという考え方でございます。

ところで、中国哲学ではすべてを「陰」と「陽」に分けようという考え方があります。中国ではすべての現象を「陰陽説」で陰と陽に分ける。これが古代から現代までまだ影響力を持っているわけです。陰陽説は「気」の理論にもとづくわけです。気という無形のエネルギーみたいなものが宇宙に充滿している。その気のありかたが2つに分類される。活力を生み出す「陽気」、それから衰退の方向へむかう「陰気」があるわけです。この相反する陽気と陰気にもとづく、陰と陽の相互作用で万物が創造され、変化する。季節の交代のような自然現象も陰陽の作用で起こると説明がされるわけです。例えば陽に属する、活発なダイナミックな方のカテゴリーは大変、動的で明るくて、熱気をもつ。だから、陽に分類されるのは、太陽だとか火ですね。それから春、夏、それから方角でいえば、東とか南。それから性別でいったら、男性なわけです。それに対して、陰のカテゴリーとは、静的で、あまり活発でない、それで暗くて冷たい冷気をもち、消極的だ。これが天体でいえば、太陽に対する月です。季節でいったら秋、冬。それから方角では西、北。それから火が陽であるのに対して水は陰である。

この陰陽説は二元論ではありますが、二項対立ではありません。つまり、気というものがこれは2つの側面を持っている。気が陰になるときと陽になるときがあって、どちらかがどちらかを完全に排除するものではない、2つは必ずセットとなって共存するものだという事なわけです。陽の気の勢力が強くなったとき、季節が暖かい季節になる。それが今度は衰えて冷たい季節になる。陰と陽とは常に共存しながら、片方の勢力が伸びてきては、それからその逆が起こるとされるのです。この無限の連続と交代によって、宇宙の秩序が守られているとするわけです。この陰と陽とがセットになることによって、男と女がいるんで、子孫が生まれたり、あるいは太陽と月の関係で昼夜が起こるというのです。つまり、このような考え方を拡張しますと、現象というのは、すべて存在意義があるんだということになります。

それで、対照物があることによって、それだからこそ活力が生まれる。陰があるから陽というのが意味を持つてくるんだと。そこで、善が悪を徹底的に滅ぼさなくてはならないというものでもない。善の存在のためには悪が必要なんだという、そういう考え方もできるわけです。

そもそも、絶対的な善だとか絶対的な悪があるだろうか。現象そのものには善も悪もなく、観測者の立場によって善と悪は変わってくるのだというのが東アジアの論理であります。AとBの絶対的対立ではなくて、例えば初めはAの立場だった者が立場が変わると、AとBの重複する領域へ移行する。そして次にはBに移ってしまう。これを宗教でいえば、ある宗教の信者が別の宗教に改宗したことになります。一神教では改宗というのは、人間としてあるまじきことなわけですね。ところが、それは我々にはできる。一神教では対立物の一方を選択し、でこちらに自分は応援するとか、あるいは自分はこちらに信頼を置くとか、そういった立場をいつも鮮明にしなくてはならない。そういった論理に育った文化からしたら東アジア社会の文化に育った我々は、「個の確立」ができていないという、そういうふうな見方をされるわけです。

ところで中国哲学では陰陽説に関係しながら、「五行説」というパラダイムがありまして、その「陰陽五行説」を説明すると時間はかかるし、五行説というのはたいへん形式論理的なパラダイムであって、ここでは省略いたしとします。

さて、時間についてちょっと考えてみます。つまり、仏教の輪廻転生という観念や陰陽五行説での時間は、循環する時間なわけですね。始めがあって終わりがある、出発点と終着点があるのではなくて、ぐるぐるぐるぐる循環するものとして時間をとらえるのです。もちろん、季節をサイクルとしてとらえて、1年の時間は循環しているんだという季節観はどの民族にもあるわけです。しかしながら、歴史としての時間のサイクルとなると、文化によって異なります。例えば、時間の数えでいえば、東洋の十干十二支ですね、これは60年で本卦帰りでもとへ戻ってくる、そういった時間の数え方があります。しかしながら、一神教の時間というのは、出発点と終点をつなぐ直線的な時間です。つまり、時間というものは、神が世界を創造したことによって時間が始まった。そして最後の審判に向けて一方向に向かって時間が流れる。そして、その終点に達したら、もはや変化がない、永遠に達し、神の支配する世界になるんだということになる。これを象徴するのが、例えばユダヤ暦だったら、旧約聖書における天地創造を起点として、それから何年たったかという時間の勘定のしかたをします。キリスト教の時はイエスの降誕のときから数えて、紀元何年かという西暦のカレンダーが使

用されます。イスラム暦ではムハンマドがメッカからメジナに移った聖遷をしたときを紀元の始まりとする。

そういった時間が東アジアの方にもなかったわけではありません。例えば、あまり使われませんが、仏暦というお釈迦様が死んだときを起点とする、そういった時間の数え方があることはある。また、中国ではあまり使われてない孔子暦という、孔子の誕生から時を数える暦がある。日本でも神武天皇のときから戦時中、強制された皇暦というのがあるんですが、一般化していない。むしろ、時間の数え方としては元号ですね。皇帝なり天皇の即位から数える。それで次の天皇になったらまた変わる。あるいは十干十二支の循環する時間であるとか。このような一神教の時間の観念に人間の営みを乗せようとして、近代に成立したのが進歩史観とでもいったらよい西欧の考え方なわけです。時間というのは後戻りすることがない。それで大筋としては人類の発展の方向にむかって、歴史は積み重ねられているものだ。そういった信念のもとづくのが進歩史観なわけです。そういった進歩史観の深層には、やっぱり神の定めた目標に向かって人間は努力すべきだという、どうもそういった深層心理があるのではないか。これに産業社会の論理が乗りますと「時は金なり」という言い方になるわけです。

東アジアで進歩史観をいち早く取り入れたのが近代の日本であって、それで産業社会化を目指したわけです。また、日本は異民族による支配を経験してない、国の滅亡というのを経験してない。多少の浮き沈みはあっても、大筋としては現在よりも未来の方がよくなるんだと、そういった未来への希望が持てた歴史の社会でした。それで我々は近代化にあたって、神様抜きで直線型の時間の観念が受け入れられたわけです。もっとも、現在ですと、もう未来に対する信頼があまり持てないようになったようすが。

さて、こういった現象を二分して、どちらを選択するか意思決定をさせる。この二項対立の論理というのは、実に単純で明解です。そして、きわめて実用的です。これは現象の複雑さを単純化させて、論理の体系を構築するのに実にやりやすいものの考え方です。そこで、西洋の近代科学というのは、この二項対立の考え方のうえに乗って、発達したわけです。現在のコンピューターも原理的に言ったら二項対立の論理の産物なわけです。

それに対して、状況に応じて真理というものはこれは変化するんだ、それで、真理というのは一つだけに限らなくてもいい。複数あってもいいじゃないか。複数の真理の共存を認めるという、そういった東アジアの論理というのは、大変非科学的で、妥協的で、折衷的で、ダブルスタンダードがあったというふうに非難されることが多いわけです。しかし、静的な一つの真理に対して、現象というのは絶えず変化する、そして立場によって異なる複数の真

理が存在するという、東アジアのものの見方というのは、案外これは現代の科学の最先端のところにあうのではないかという気もしないわけではないです。

もう持ち時間の問題で触れませんが、例えば生命を殺すことを禁じる仏教思想だとか、山川草木にも靈魂を認める日本のアニミズムというのは、人間と同等の存在として自然を見ていこうといった立場なわけです。このような、感覚的な心情に科学を結合させて、それで自然にあまり迷惑をかけない人間の振る舞い方というものを規定する倫理ができれば、地球環境問題にとっても有効なんでしょうね。また、仏教哲学の「空」(くう)の思想とか、道教の虚無思想とかですね、儒教の「中庸」(ちゅうよう)の思想などそういった東アジアの思想を進歩主義の後の世界に役立つ遺産として使えないのだろうかと思います。ただし、それをどうやって現代的な新しい論理や哲学に構築するかというのは、もうどうも私の手に余ることなので、こういうふうな見方もできるのではないかということ指摘するだけで、おしまいいたします。(拍手)

## 石毛直道氏の講演についての討議

【高 畑】 どうもありがとうございました。片倉先生、一神教の立場から何か。

【片 倉】 一神教と言ったら... ユダヤ教、キリスト教、イスラムは一つの流れをくんでいるというふうに言われるんですけど、そこへ...いいの。

【石 毛】 もっと大きな声をお願いします。

【片 倉】 ごめんなさい。ちょっと声を痛めているものですから。のどを痛めているもので。いわゆる一神教の中でのユダヤ教、キリスト教、イスラムは同じところも確かにあるんですけど、イスラムはね、ひっくるめて論じられるべきではないというふう考えられているんですね。というのはね、大変アジア的だと...アジア的という言葉は少し大き過ぎるんですけど、例えばね、さっきおっしゃっていた動物と人間、人間が動物をコントロールしたとか、人間が自然を支配するとか、そういう考え方って一神教の考え方と言われますよね。ところがね、そこから時間というので、最後の審判がきて、そして人間はそこで裁かれて天国へ行くという。ところがね、そのときにキリスト教の場合は人間だけがもちろん裁かれていく。けども、イスラムは動物も一緒なんですね。それで、存在の価値においては、ここへいくと大変アニミスティックなんだけれども、その場の価値においては、そこら辺の石ころと自分...人間とも同じ価値を持っているなというふうな感じがするんですね。こうい

うふうなこと…今日お話しくださった中国の仏教の考え方にすごく似ているだろうと思うんですね。御存じの方も多いでしょうけど、世界的な、日本が誇れる世界的なイスラム学者の井筒俊彦先生、彼はね、もともと禅の研究をしていて、そしてイスラム教へ行って、そして最後のときに仏教を見つけてね、仏教の思想はカルマの思想以外は全部イスラムがかかっているとおっしゃっていますね。仏教とイスラム、それから…今、私はそれを少し勉強したんですけれども、神道とイスラムは共働説、共通の価値になるとかね、あると彼が指摘して、絶対的に私は文化人類学的な立場でそれを立証してみようと思ってやっているんですけどね。今、一神教の立場からとおっしゃったんで、私はあまりその立場じゃないということを上申上げてたくて少し、最新の私の勉強しているところですが。

【石 毛】 ありがとうございます。それで…。

【高 畑】 ユダヤ教の父というか母というか、キリスト教とイスラム教は異母兄弟みたいなものだというふうになんとなく認識してきたものだから、今、御指摘いただいて。

【片 倉】 ただ、イスラムは出てきたのは7世紀で、随分新しいんですね。それで、仏教的なもの、神道的なもの、アミニステックなもの、もちろんキリスト教、ユダヤ教、みんな取り込んでしまっているというのがあるんですね。それが今これだけ14億で、あと何年かすると2人に1人はイスラム教徒になるだろうと言われるような、そういう何ていうかな、いろいろなものを取り込んだ、それこそ海王星を抱き込んでしまったというところにあるのではないかと、仮説ですけど。

【石 毛】 それはですね、私があまりにもステレオタイプ化させすぎて、また、イスラムについての認識が足りないというふうにおっしゃっています。この西欧の近代につながるユダヤ教とキリスト教の論理を中心に一神教を取りあげたわけですが、私が割と知っているイスラーム社会であるインドネシアや東アフリカでは、厳格な二項対立の論理とはちがう土着的な観念がイスラームに取りこまれております。おっしゃるとおり、ステレオタイプ化して述べた一神教としてのイスラームの論理とはちがいます。

それから、一神教と軽々しくいってしまいましたが、私にとって頭にあったのは西欧的な論理を構築した一神教ということで、文化人類学者がいう「原始一神教」というものは別の話だということわりをする必要があります。

【小 平】 今の関連で。明治の日本が皇室中心に仕立てた神教、明治時代の日本の神教というのは、あれは一神教をまねたというか、一神教のやり方を導入して近代化を図ろうとしたというふうに解釈できるんですか。私はいつもそんなふうに見ているんですけど。違います

か。

【石 毛】 その辺は近代史の研究者ではないので、あまりきちんとしたお答えはできませんが。明治の国家神道をつくっていくときに、キリスト教の教団組織などが、モデルとしての参考になったでしょうが、どうも宗教そのものの論理とは違う側面でのことであり、神道の宗教的側面には影響を持たなかったようです。むしろ、天皇の権威をいかにもり立てるか、そのために神道というものを使い、それから一方では近代化に当たっての法律だとかいろいろなルールを国民に普及させるために、そのところで仏教の影響というのはある程度排除しないとイケない。江戸時代には檀那寺が戸籍の管理をしていたわけですから。それで廃仏毀釈ということをおこない仏教の勢力を弱めた。それで天皇の権威を高めるには、天皇を頂点とする国家神道を形成したのです。廃仏毀釈にいろいろな反対はあったけど、すんなり行ったわけですね。そうかといって、我々は本当に神道を佛教にかわる宗教として受け取ったかという、そうでもない。どうも日本では一神教的な強烈な宗教観というのは、いままで一度も根づいたことがないのではないかと思います。

【長 倉】 私も全く賛成ですね。恐らく神道的なもの、宗教と考えるかどうかと外国の友人からよく質問されますけどね、これは私はいつも宗教ではないという答えをしているんです。

明治の国力のもとになったものは何かというのは、大きな問題だと思うんですけども、今の日本社会の問題への対応を考えるうえでもですね。それはやっぱり、各方面で優れた人材が育っており、その点で国民の力がアップしておった点が大きいと思うんですね。その原因はさらに教育の問題とかいろいろな問題があるんですけども。それに加えて、ある種の精神的な高揚があつた時代には非常に強かつたということは感じられますね。江戸から明治の初めにかけての日本の教育が非常によかつたというのはいろいろな人が指摘していることで、駐日米国大使として活躍したライシャワーもそうですし、それから1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センもそういった意味のことを書いていますね。それに、知的好奇心があつた時代の日本人に特に強かつたのではないのでしょうか。しかも政府の政策が非常によかつた、教育の政策がよかつたと思うんですね。

【片 倉】 日本人の知的好奇心というのはもうあつた時代だけではなくて、昔からそうなんですね。鶴見和子さんなんか「日本人の好奇心」というような本を出してらっしゃいますけれど、いろいろなものを取り入れるという。ですからね、イスラムなんかに関してね、9.11後、ヨーロッパやアメリカなんかではかなりそのイスラム関係のビジネスだとかあるいはモスクだとか何かに投石事件とかあるんですね。でもね、日本は9.11後、少しイ

スラムを勉強しようとかね、知りたいとかいう人の方がふえていって、その投石事件とかはね、これは警察でも調査しているし、それからイスラム関係の人が調査しても1件もないんですね。不思議なぐらいに。それだけ何か結構我々日本人が思っているよりも日本人の受容力というかな、それは知的好奇心に裏づけられているのではないかと思いますね。

【長 倉】 実際、教育の力だと思いますね、特にあの時代の日本人は好奇心が旺盛だったし活力があったという、そういう印象を受けますね。

【石 毛】 そこでは、先ほどの尚古主義というのに日本はやられなかったということも一つの意味を持っているかもしれません。それから、我々の日本文明というものは長い歴史のなかで内発的に形成したもののだけれど、いいものは海外からやってくるんだという信念も古代から続いてきました。輸入したものを日本なりにうまく使って、そのうち日本なりに変質させて、消化する、そういった歴史の蓄積がずっとありましたから。

【颯 田】 よろしいですか。今、先生その尚古主義、日本には定着することがなかったというようにお話だったと思うんですけど、そのときには日本の文化としてお手本になるべきものが中国だったと思うんですけど、そのときにその手本となるべき中国で使っているそのシステムというのを受け入れなかったというのはどうしてなんですか。

【石 毛】 中華帝国ををとりまく衛星国家である朝鮮半島、あるいはベトナムの北部の中国化した国々というのは文明の制度全部を中国をモデルにした国家形成をし、中華的なイデオロギーが国家統治の原点になってきます。ところが、我々がそうはならなかった。その理由としていちばん決定的なのは、日本は中国に支配されることがなかったということです。朝鮮半島にしるベトナムにしる、中国の植民地になった、そういった経験があります。

【長 倉】 海に囲まれておったのが非常に有効だったというふうに私は考えているんですよ。韓国や中国もそうですけど、大陸にあつたら日本も随分変わってしまったのではないかと思いますね。だけでも海に囲まれておったというのが、少なくとも明治・大正ぐらいまでは大きな日本の力にもなったし、また、文化を育てる上でも有効だったということ、このごろ非常に感じるようになりました。これは本当に基礎かどうかというのは、もう少しいろいろ考えていく必要があると思っておりますけども。

【小 平】 元寇で負けていたら。

【海 部】 日本人のあまり深く深入りするとまたちょっとあれなんですけど、また、私の言っているのは間違っているかもしれないんですけど、一応、日本人は欧州がらみには非常に好奇心旺盛であると、これはイエズス会なんかの教訓に書いてありますし、それ本当だと思う

んです。だけど、じゃあ日本の上層階級はそうであったかという、非常に古い、中国のその尚古主義こそは持ち込まない、それは日本の卓見だというものです。ただ、やはり先人のものはいいものであるという感覚は、日本のその上層階級にずっと根強くあるのではないのでしょうかね。だから明治維新がなぜうまく成功したかといいますと、そういうふうにとらわれない若い人がわっと出てきたという、これはものすごいことだったと思いますが。やはり旧来の上層支配主義、階級にはああいう変革をする力がやっぱりあのときなかったのだと。

【片 倉】 そうですね。日本はね、ちょっとこういうふうに言うとはけるかもしれないけど、上の方はだめなんですよ。(笑) それで、民の力とかね、今でもその国際化がね、予想外に進んでいるのは、お上の方はものすごく排斥しているんですよ、今もう1日でも不法滞在したら引っ張っていくとか、もうものすごい排斥をしていますよ。だけれどもね、民、それもね、結構田舎の人たちがね、まあ、ええやんかという感じでね、受け入れているところがあるんですね。京都なんかにしたって、普通の人たちがまあまあと言うんで、新しい文化、違った文化をうまく取り入れてやっていっているところがありますね。

【石 毛】 日本が歴史的に中国の社会秩序と違うのは、技能を持った民衆を評価したことです。中国だとすべての知的創造だとか、芸術は知識人が基本になっている。芸術だって士大夫といわれるような知識人が書いた文人画が大変評価されてきた。ところが、専門の絵描きさんが書いた絵というのは、画工の芸として一工人すなわち職人芸は一ランク下のものとされた。そういった秩序の社会と比べたら、日本の場合は、物づくりだとかそれに携わる職人たちが決して差別の対象にはならない。そういった人が、芸によっていくらかでも認められ、名人として評価された社会でもあった。その基礎としては、やっぱり教育というものが中国ではその一握りの知識人だけの特権のものであると。知識や教育システムが、ある階層だけに偏在して、それだから民度が上と下の階級でたいへん違う。日本は江戸時代の寺子屋の教育の普及ということはありますけども、それ以前から民衆でも結構字が書ける人がいたりなんかした。田舎でもその気になったら勉強することが可能だったような、そんな社会とであったこととの関係もあると思っています。

【高 畑】 それでは、先生、どうもありがとうございました。(拍手)